主体的・対話的で深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

国語

生徒自作のクイズを解き合う活動で基礎・基本の定着を図り、主体的な学習行動を促す

14:45 グループ活動

授業ハイライト

●1年生「国語総合」の漢文で、『十八史略』の「完璧」を学ぶ全5時間のうちの5時間目。前時に生徒個々で作成した漢文に関するクイズを、グループで話し合って各グループ1問に絞り、それをほかのグループと出し合った。（P.35に単元の指導計画を掲載）

４～５人のグループになり、自分が前時に作ったクイズを１人３問ずつ付箋に記入して提示。それらを見比べ、難易度や各自の関心などに配慮しながら、自分たちのグループを代表するクイズを１問に絞り込んでいった。クイズの内容は、漢文に関するものなら何でもよいが、誰も答えられないものにはしないよう、事前に津覇先生が伝えておいた。

沖縄県立八重山高校
津覇実貴 つは・さねたか
教職歴５年。同校に赴任して２年目。
国語科担当。１学年担任。
2017年度から本格的にアクティブ・ラーニングに取り組む。

津覇先生のアクティブ・ラーニング

楽しさと基礎・基本の定着を両立するALを目指す

津覇実貴先生がアクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業を本格的に始めたのは、沖縄県のALの研究指定校になった沖縄県立八重山高校に2017年度に赴任してからだ。専門家による研修会への参加や先輩教師の授業参観などを通して知見を深める中で、津

沖縄県立八重山高校

◎県立の八重山中学校と八重山高等女学校を前身として開校した。八重山地区唯一の普通科高校。「師弟同行」を校是に、「学徳・進取・雄飛」を校訓として、「真の文武両道」「1ランク上の進路実現」をキーワードに教育活動を展開している。
◎設立　1942（昭和17）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2017年度進路実績（現役のみ）
国公立大は、琉球大19人、名桜大1人、県外国公立大15人が合格。私立大は、延べ114人が合格。大学校短期大学校1人。専修学校・各種学校53人。就職9人。
◎URL　http://www.yaeyama-h.open.ed.jp/

15:05 クイズの発表②

今回のクイズ作りでは、他教科との相乗効果をねらって、同時代の中国史からもクイズを作ってよいことにした。すると、『十八史略』が南宋時代に成立したことを踏まえて、「元朝を興して南宋を滅ぼした人物は誰？」、「『完璧』の故事が生まれた戦国時代の趙に隣接する国を２つ以上挙げると？」など、世界史に関連したクイズが複数のグループから出された。

15:00 クイズの発表①

グループの代表者がクイズを出題したら、ほかのグループは教科書や参考書を見ずに、グループ内で相談して、１分以内にホワイトボードに解答を書いて提示し出題者は各グループの解答をチェックするという活動を、全グループのクイズが出題されるまで行った。第１問は「『完璧』の主人公の名前を漢字で書くと？」。全グループが正解し、教室中に拍手が起こった。

覇先生が関心を持ったのは、英語の授業で行われた、クイズ形式で単語や文法を学ばせる指導だった。

「私が初任の頃から目指していたのは、生徒が楽しみながら学力を高めていく授業です。ゲーム的な要素を取り入れることで、その理想に近づけるのではないかと考えました。実際、漢字や語句、古文の単語や文法、漢文の句法なども、クイズ形式にすると、生徒は楽しんで学習に取り組むようになりました」

提示する資料も、生徒が興味・関心を持つようなものを選ぶ。例えば、津覇先生が17年度に行った公開授業では、『土佐日記』が女性に仮託して書かれた理由を考えさせた。クイズ形式やジグソー法を取り入れた活動の中で、津覇先生は、平安時代の男女の日記と、現代の男女のメールを比較させた。すると生徒は、男性が情報を伝えることを重視するのに対し、女性は感情を伝えることを重視するというそれぞれの文章の特徴が、時代を超えて共通していることに驚きながら、活発に討論を繰り広げたという。

思考の活性化・深化への配慮

クイズ作りで学習内容を振り返り、周辺知識にも興味・関心を広げる

今回取材した授業は、漢文の『十八史略』にある、「完璧」の語源となった故事について取り上げた単元だった。単元計画通りに、1～3時間目は基本的な句法や語句の意味を、津覇先生が講義形式で解説した上で、ペアで本文の書き下し文を作成し、グループで現代語訳を行った。4時間目は学習した単元やテーマに関するクイズを生徒個々で作り、5時間目の本時では、作成したクイズを用いるグループワークを行った。

津覇先生は、同じ内容のグループワークでも、学力層に応じて声かけの内容を変えている。上位層のクラスでは、授業の最後に解説を行うと伝えた上で、ほぼノーヒントで現代語訳を行わせる。一方、下位層のクラスでは、随時ヒントを出しながら1行ずつ現代語訳をさせ、完訳に近づけていく。

津覇先生が今回の単元で特に学びを深める時間として設定したのが、4時間目のクイズ作りだ。以前は、先生が作問し、生徒に答えさせていたが、生徒にクイズを作らせることで、前時までの学習内容の復習の機会となり、周辺知識への興味・関心も広がると考え、現在の形にした。

クイズは、生徒が興味・関心を持った事柄について自由に作らせる。ただ、内容が広がりすぎないよう、使用する資料は国語の教科書と参考書、そして今回は世界史の教科書とした。世界史の授業で『十八史略』と同時代の中国史を学習していたため、クイズの範囲に加えたのだ。

「クイズ作りを通して、幅広い知識が自然と身につきます。国語が苦手な生徒が得意な生徒より早く答えられることもあり、自己肯定感を高める機会にもなっています」

15:28 解説

津覇先生が10分間で重要句法や語句の意味を解説し、クイズを出題する活動では触れられなかった知識を補った。今回の授業では行われなかったが、毎回単元の最後に自己評価用紙を記入し、自身の成長を省察する時間も設けている。授業後、教室を清掃しながら「どんなクイズを作った？」と話す生徒の姿が見られ、漢文への関心が喚起された様子がうかがえた。

15:20 クイズの発表③

クイズ形式の授業は、ゲーム性を持たせて生徒の関心を喚起するとともに、既習事項を振り返るために行った。あるグループは穴埋めクイズを提示。津覇先生は「以前の授業で学習した内容だね」と、生徒がその内容を思い出せるよう声をかけた。「『待命於秦』の置き字『於』の役割は？」のように、1学期に学んだ置き字と本単元の内容を関連づけたクイズも出された。

授業では、学習内容の定着やメタ認知能力の向上を促すため、国語科共通の「自己評価用紙」を単元ごとに記入させる。生徒は、単元の最初の授業で本文を読んだ後、第一印象（感想・疑問、作者・作品の知識、授業への期待）を書いて自身の理解度を確認。単元終了後、ルーブリックを見ながら、「働きかける力」「状況を把握する力」「課題を発見する力」を各3段階で自己評価し、学習成果と課題・質問を自由に書いて提出する。「どのような力を身につければよいかがルーブリックで分かるだけでなく、振り返りを通じて学力の伸びが実感できる」といった生徒の声もあり、授業の羅針盤として機能している。

場づくりへの配慮

間違いを許容する雰囲気がグループワークを活性化

津覇先生が理想とする、グループワークにおける1グループの人数は3人だ。ペアワークは、音読など、目的が明確な活動では効果的だが、自由討論ではペアを組む相手との相性によって議論が活性化しない場合がある。また、4人以上では控えめな生徒の発言が少なくなってしまう。今回の授業では、クラスの人数や教室の広さを考慮して1グループ4～5人としたが、中・下位層のクラスでは3人を基本としている。

さらに、以前は、発表者や書記といったグループ内の役割を輪番制としていたが、今はその都度、生徒たちに決めさせ、主体性や協働性を育んでいる。

間違いを許容する雰囲気づくりにも努めている。入学時から「発表すること自体が大切。間違いを恐れないで」と繰り返し呼びかけ、生徒が間違えても「同じことを考えている人もいると思う。みんなのためになっているよ」と声をかける。成績がよい生徒ほど間違いを恐れる傾向があるが、間違いを肯定的に受け止める雰囲気をつくることで、生徒に安心感が芽生え、話し合いが活性化するのだ。

成果と課題

クイズを楽しみに自学自習に励む生徒たち

ALの視点を取り入れた授業を始めてから、生徒が主体的に学習するようになった。「次の授業でクイズをやります」と伝えると、津覇先生が指示をしなくても、教科書や参考書を使ってクイズ作りを自ら進んで行うと言う。

「小テストを課しても勉強すると思いますが、それは外発的な要因によるものです。同じ学習内容でも、クイズ形式にすることで、生徒はやらされ感を抱くことなく、意欲的に取り組みます」

クイズを行う授業の前には、生徒たちは「どんな問題を作った？」などと楽しそうに話しながら、自分たちが作ったクイズを出し合っている。そして、授業終了後には、クイズの内容に

単元の指導計画

【教科・科目】国語総合　**【分野・単元】**漢文　**【テーマ・作品】**『十八史略』「完璧」　**【設定時数】**全5時間の中の5時間目
【単元目標】1. 訓読のきまりに注意し、書き下し及び現代語訳ができるようになる。2. 文章全体の内容を把握し、故事成語の由来を理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	• 重要句法、訓読のきまり、単語の確認 • 本文の書き下し	• 句法（受身・使役）・単語の意味を理解する。 • 既習の知識を活用し、本文を書き下す。 【知識、協働性】	①本単元の目標の確認。 ②『十八史略』及び当時の中国について確認する。 ③句法（受身・使役）、及び語句の確認。 ④ペアで協力して、本文を書き下し文にする。	【対話的な学び】 • 本文の書き下しは、ペアで協力して完成させる。既習の知識で可能な学習のため、教師からの働きかけは極力控える。	• ワークシート、行動の観察
2	• 書き下し、訓読の確認 • 本文前半部分の現代語訳	• 訓読に必要な知識の定着。 • 訓読のきまりや文脈に注意し、現代語訳ができるようになる。 【知識、思考力、協働性】	①前時に行った書き下し文を確認。 ②書き下し文を音読し、読みを確認する。 ③グループで協力して、前半部分を現代語訳する。	【対話的な学び】 • 間違っていてもよいので、グループで協力して現代語訳に挑ませる。 • 進捗状況が思わしくないグループには、教師が介入しヒントを与える。	• ワークシート、行動の観察
3	• 本文後半部分の現代語訳 • 内容の確認	• 訓読のきまりや文脈に注意し、現代語訳ができるようになる。 •「完璧」の内容及び故事成語の由来を理解する。 【知識、思考力、協働性】	①グループで協力して、後半部分を現代語訳する。 ②現代語訳を発表し、現代語訳及び文章全体の内容を確認する。	【対話的な学び】 • 間違っていてもよいので、グループで協力して現代語訳に挑ませる。 • 進捗状況が思わしくないグループには、教師が介入しヒントを与える。 【深い学び】 • 本時までの学習内容を振り返り、学習の深化を図る土台を固めさせる。	• ワークシート、行動の観察
4	•「完璧」に関するクイズの作成	• 主体的にクイズを作成し、前時までの学習内容の活用及び深化を図ろうとする。 【知識、思考力、判断力、主体性】	①前時までの学習を振り返る。 ②本単元に関するクイズを個人で考え、付箋紙に記入する。	【主体的な学び】 • 前時までの学習内容の確認を生徒自身で行わせる。 • 前時までの学習内容で生じた疑問や気になる点、興味を持った点などを中心に、書籍やインターネットを活用して答えを導かせる。 【深い学び】 • 教科書に記載されている内容のみにとらわれず、自身が興味・関心を持った事柄について自由に学習させる。ただし、クイズの内容が拡大しすぎていないか、クイズの内容の妥当性についても吟味するように指示する。	• 行動の観察
5	•「完璧」に関するクイズ • まとめ	• グループで協力して、積極的にクイズに参加することができる。 • 訓読のきまりや語句の意味、故事成語の由来を理解する。 【知識、表現力、主体性、協働性】	①前時に作成したクイズをグループで共有し、クイズの選定を行う。 ②1グループずつクイズを出し、ほかのグループはその答えを話し合う。 ③本単元の振り返り及び自己評価を行う。	【主体的な学び】 • 積極的にクイズに参加できるよう、ゲーム性を持たせた展開とする。 【対話的な学び】 • 前時に個別に学習した内容を共有するツールとして付箋紙を使用。作成したクイズを付箋紙に記入させ、グループで共有・整理させる。 【深い学び】 • グループ内でのクイズの共有や、クイズを通して、学習内容の深化を図る。 • 自己評価用紙の記入を通し、本単元学習においての自己の学習を振り返らせる。	• 自己評価用紙、作問（付箋紙）、行動の観察

＊津覇先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

ついて話を続ける生徒も多いと言う。いずれもAL導入前はほとんど見られなかった光景だ。また、実力テストでは古文の成績が向上しているなど、学力面の成果も表れ始めている。

今後の課題は、生徒の活動をさらに増やすことだと、津覇先生は語る。

「基礎・基本の内容については私が解説していますが、自分が話し過ぎだと感じています。理想は、今以上に生徒の活動を増やし、深い思考と知識の定着を両立させる授業です。単元計画を一層綿密に組み立て、良質の資料を用意するなど、事前準備をしっかり行っていきたいと考えています」

生徒の声

玉城莉里（たましろ りさと）さん　クイズを作るために、教科書や参考書などでいろいろ調べます。語句の意味や故事成語の由来などの周辺知識も自然に頭に入ってくるので、クイズ作りを通して興味・関心の幅が広がりました。グループワークが楽しみで、クイズの授業の時は前向きに自習に取り組むようにもなりました。

大城千空（ちそら）さん　入学当初は間違ってはいけないという緊張から、グループワークでもなかなか発言できませんでした。「間違ってもいいよ」という津覇先生の励ましを受ける中で、自信を持って発言することができるようになりました。これからは、クラス全体の発表の場でも積極的に発言できるように頑張りたいと思います。